トピック　【ぐんま教育のつどい２０１８】

そろそろ、部活について話しませんか？

2 月 11 日（日）、群馬県高等学校教職員組合（群馬高教組）主催の教育研究集会「ぐんま教育のつどい 2018」が群馬県青少年会館で開催されました。第一部の全体会のテーマは部活動。現在、学校の部活動についてメディアで積極的に発言している名古屋大学大学院准教授の内田良氏による基調講演「学校の日常を『見える化』する―部活動改革から働き方改革まで―」が行われました。群馬高教組の機関誌「高教月報」の記事を参考にして報告します。

エビデンス（科学的根拠）が重要

◎「学校安全」という言葉は 1950 年代からあるが、学校管理下で子どもが何人亡くなっているかのデータがなかった。

◎柔道では 31 年間に 118 件の事故があったが報告は個々バラバラ。起きたことが見えていない。ところが似たような事例が多い。重大事故は 5～8 月初心者が大外刈りで受けている➡初心者の受身が未熟な状況で大技の練習が行われることが問題➡この点が見え、受け身の練習を徹底させることで死亡例がゼロとなった。

サステナブル（持続可能性）が重要

◎高校で部活を一生懸命やっていた子が大学ではやっていない。期限つきの楽しさではなく、ずっとやっていけるあり方を追求すべきだ。

◎組体操が問題になった。倒れる練習や低い形での基本練習が大事ということが指摘されて事故が大きく減少した。組体操をやめろというのではない。実際、組体操をしなくなった学校は 2 割だけ。専門家の先生も、「子どもが泣くのは見たくない」と言っている。いかにみんなが楽しくやるか、次世代につなげていけるかが課題。

ネットやマスコミで転換の動き

◎全国各地の現職教員が部活動の教員の負担減少・生徒の負担減少を求めてネットで署名活動を行い、約 50 万筆を文科省に提出。マスコミやツイッターなどを利用した。

◎本来、いじめなどがあるとマスコミはあらかじめ、先入感をもって取材し、学校批判をしてきたが、最近は変化してきた。教職員の多忙化・ブラックな状況➡「学校の先生は実は大変」と同情的な姿勢がみられる。しかしせっかくマスコミや市民が教職員の実情に目を向け、救急車を寄せてくれるような状況であるにもかかわらず職員室は無風状態。学校とネット上やマスコミの盛り上がりの間にギャップがある。

制度設計の必要性

◎部活動は楽しい・意義がある➡だからこそはまり、ブラック化する。教育的意義を語ればどんどん加熱していく。登下校指導などに仕事も教育的意義を認めると無制限にひろがる。優先順位をつけていく必要がある。

◎普通の授業で場所や時間が重ならないのは、制度があるため。国語の授業が楽しいからといって、無制限に行われないのは単位数や授業時間などの制度があるため。しかし部活動はグレーゾーン。部活には制度設計がないから。昨年の栃木県の雪山の事故…経験の浅い先生が引率していた。藤岡中央高校の事故…校庭をサッカー部と陸上部が隣接して使用していた。フェンスもない。責任は学校や顧問教師にはなく、放置してきた文科省にある。

◎教員給与特別措置法（1972 年施行、通称給特法）によって教員の仕事には残業代が発生しないため、長時間労働でも国や自治体は困らない。そして残業は減らない。

◎学校現場は勤務時間を調べない文化が定着している。労務管理をしない職場である。

《文責：倉林順一》